

特別座談会 奈良教育大学への期待



〈開催日〉平成20年10月8日(水)
〈場所〉奈良教育大学 学長室

来る11月22日の本学創立120周年記念式典の際、併せて開催するシンポジウムのテーマ『奈良教育大学への期待』に合わせ、富岡奈良県教育委員会教育長と柳澤学長が対談を行い、同テーマについて語っていただきました。

▼本日は大変お忙しい中、お時間をとっていただきありがとうございます。早速ですが、昨今の教育現場における課題について、お話しいただけますでしょうか。

富岡教育長 あえて言うならば、子どもたちが生活習慣を身につけていないことや、規範意識が薄いことでしょうか。根っこは、勉強が好きでないというのがある。このような状況が続けば、体力の低下、正義感の欠如、これらが引き金となって、学力低下につながっていくことに危機感を持っています。今すぐにでも対応策に取り組む必要があると考えています。

また、子どもとコミュニケーションがうまくとれない先生が増えています。先生自身が生活してきた環境にもよりますが、少人数の中では話ができても、大勢の前ではうまく話せなくなる。教員を志すに当たって、これらの背景を自分なりに克服しているつもりでも、いざトラブルが起ってしまった時には殻に入ってしまうなど、前に進めなくなる。今は、学校の中で教員の年齢構成に空白の年代が生じていて、身近に相談できる教員が少なくなっているという構造的な問題も起こっています。

柳澤学長 教師と子ども、教師と教師、教師と保護者……といった人と人との関係を積極的に構築していく力は、教師の能力としてとても重要ですね。子どもを理解し、さらに保護者や同僚たちとも相互に対応できる。昨今の複雑な社会情勢の中、これらの必要な力量を身につけることは、教員にとってとても難しいことです。

本学では、学部生・大学院生を対象に、平成17年度から奈良市内の小学校と連携して、「鍵の場面における「対応力」を備えた教員の養成(文部科学省「教員養成G.P.採択事業」)の教育プログラムを開発提供しています。つまり、さきから返すことが、教職大学院への新たな現職教員の派遣を呼ぶことに繋がっていると思います。これら教員が個人として、さらに組織の一員として、学校改善に寄与するものであることが必要ですね。

また、本学の教職大学院では、同時にストレートマスターも学んでいます。これら学生にとって、現職教員と協働の学びを形成できることは、コミュニケーション能力や子ども理解などにおいて、違う視点からの力量が得られるなど、大きなメリットです。2年後、第一期生にご期待いただきたいと思えます。

▼奈良県教育委員会と大学との新たな連携について、お聞かせください。

富岡教育長 教師は、社会情勢などによって、絶えず新たな課題を負うことが責務となつていきます。現実には、児童生徒や保護者をはじめ、いろんな人との関わりにおいて生きた教育をし、責任を取らなければなりません。このような状況の中で求める教師像があり、大学との連携において互いにこれを補完しながら、教育の充実発展を実現していきたいですね。

柳澤学長 奈良にある大学として、入試において地域推薦枠を増やす方向で検討を進めています。奈良県内で教員を目指す、意欲ある地元高校生をより多く受け入れ、輩出していくことで、地域貢献を果たしたいと考えています。

また、教職大学院の実務家教員として、継続して有能な方を迎える一方で、大学教員の派遣、教員免許更新講習における連携実施など、今後も引き続き連携を強めていきたいと思います。

▼本日はご多忙の中ありがとうございました。

子どもたちに、現場の先生がその「鍵の場面(教育指導上、鍵となる重要な場面)」において、授業中や放課後にどのように指導しているのかを問近に見て、その背景なども把握する。今の教育実習ではどうしても授業をするだけに終始してしまう。そんな中、このプログラムを通して「対応力」や「表現力」を身に付け、自らの実践を知識・知恵として獲得してほしいと願っています。

▼教師にはどのような力が必要で、またそれに対してどのような方策をお考えですか？

富岡教育長 コミュニケーション不足の背景には、少子化の影響や家庭環境、地域環境の変化など、奥の深い問題がありますね。教師の方だけに「打たれ強く、しなやかに受け止め、バネのように跳ね返す力を持つてほしい」と言うのは酷かな？それでも、子どもたちのためにも、持つてもらわなくては困るのです。

一つの方策として、実務経験3〜5年の教師を核に、教員を目指す大学生にも、リクルーター、就

職活動の二環として参加できるプログラムを、できるだけ早く実施したいと構想しています。この中で先輩の悩みを聴き、あるいは相談できる道筋を学生の時からつける。そんなつながりの仕組みをつくりたいと考えています。

柳澤学長 地域の教育力を高めるのに、教員養成大学がどのように関わるかは重要な課題です。本学では、新任教員として採用された後、少なくとも5年間は大学がサポートしていこうと考えています。就職支援室を中心に、就職先へのヒアリングなどを通して、新任教員がどこで困っているのかを知り、これを新たな教育や就職支援に生かしていく……。

学校派遣ボランティアとして、本学からも多くの学生が自ら参加していますが、この活動を通して何を体験し、どのような力をつけたのかをしっかりと見極めていくことも必要だと考えています。

▼それでは、教員を目指す学生たちに求めるものは、どのようなことでしょうか？

富岡教育長 大学が座学的になるのは当然で、得た知識を持って現場に当たっていただくのが基本ですね。大学4年間で、スーパーティーチャーになるのは難しいですね。当面、大量採用時代に入ってくる奈良県において、質の高い教員をいかに確保していくかが我々の課題です。

学校現場にできるだけ早い段階から入り、いろんな学校を体験してもらいたいですね。そのことで現場を知り、現場が求めている教員の姿を知ってほしいのです。

柳澤学長 今後の採用状況次第では、本学も国立大学として、教員養成に関わっていることの意味が問われることになりそうです。近隣の教員養成大学のほか、私立大学が台頭するという競争的な環境のもと、危機的意識を持って、教員としての質を高めることは重要であると考えています。このような状況の中、本学では今春から新たに教職大学院を設置し、高度専門職業人として、いわゆる「教師のプロフェッショナル」を養成することになりました。

▼教職大学院に対するご期待などあればお聞かせください。

富岡教育長 現場の教師には、実務経験上の課題を持って、教職大学院で積極的に学んでほしいと思っています。教職大学院での学びを通して、「中学校・小学校・県立学校でこんな問題がある」という知識を全国的ネットワークで得てもらって、それを現場にフィードバックする。将来は世代を越えて、教育を担って立ってほしいと願っています。

柳澤学長 教職大学院での学びの成果を示し、お



柳澤 保徳 (やなぎさわ やすのり)
昭和23年生まれ。大阪大学大学院修了。昭和49年、奈良教育大学教育学部助手。昭和57年、同助教授。平成8年、同教授。平成13年、同大副学長。平成15年から同学長。



富岡 将人 (とみおか まさと)
昭和26年生まれ。愛知大学大学院修了。昭和54年、奈良県採用。平成12年、総務部新行財政システム推進室長。平成15年、教育委員会事務局教職員課長。平成18年、同教育次長。平成20年から教育委員会教育長。



Profile